

『ダンシアッド』における風刺の研究（要約）

福本 幸之

本論文は18世紀のイギリスの風刺詩人ポープ(Alexander Pope)の代表作である『ダンシアッド』(*The Dunciad*)の風刺について、その起源、対象、手法について分析した総合研究である。序章では、まず作品が執筆されるに至った経緯、および研究資料として活用可能なテキストの出版史について解説した。

「経緯」については、そもそもこの種の銜学を笑い物にする風刺作品執筆の背景にあった、「スクリブレルス・クラブ」の誕生、およびその活動から筆を起こし、論文本体での議論の導入として現在この詩に3巻構成と4巻構成の2種のテキストが存在している事情について特に紙幅を割いた。それに関連して、4巻構成の『ダンシアッド』においてシオボルド(Lewis Theobald)に代わってシバー(Colley Cibber)が愚鈍の王の地位に就けられた原因となった、シバーとポープをめぐるプライベートなエピソードを紹介した。また「出版史」においては、『ダンシアッド』の研究資料として耐えうる、これまでに出版された5つの版を取り上げ、それぞれの特長や問題点を解説した。また「研究史」と題された次のセクションでは『ダンシアッド』のみを専ら扱った4点の研究書を取り上げ、それぞれの主張の概略を紹介した上で、その評価、問題点を指摘した。このセクションでの議論を踏まえた上で、最後のセクションでは「本論文の課題と意義」を述べた。そこでは第1章から第3章まで議論のおおまかな流れを予告し、これまでの研究で触れられてこなかった諸点について、本論文のどこでどのように扱われているかを述べた。

風刺の起源(「なぜ」)を扱った第1章では、まずこの作品で槍玉に挙げられている三文文士がこの時期前景化してきた要因として、定期刊行物の出現とそれと並行する会話文化の隆盛に光を当てた。定期刊行物については、まず読者の分かり易さを優先し、記事で平易な文体が用いられたことと『ダンシアッド』における三文文士風刺の関係に着目した。平易なおしゃべり口調の文体を用いたからこそ、それらが三文文士の受け皿とポープの目に映ったのである。またそのような分かり易い文体と軌を一にする会話文化の隆盛も、『ダンシアッド』における三文文士風刺の根底にあることを跡づけた。『ダンシアッド』の本文に付された擬注や附録記事に、書き言葉としてではなく、発言、「おしゃべり」という形で三文文士たちのコメントが多く載せられているのも、当時の会話文化の隆盛を念頭に置けば首肯できる。さらに定期刊行物については、短い周期で原稿の締め切りがやって来たことが、『ダンシアッド』における三文文士の有り様と関連づけられている点を検証した。この定期刊行物の宿痾とも言うべき側面が、寄稿者に「求めに応じて幾らでも書き散らすことができる」資

質を要求することになり、こうした資質が『ダンシアッド』においてポウプがブラックモア(Richard Blackmore)や桂冠詩人に認めた能力と一致していたのである。ポウプは『ダンシアッド』の附録記事において、桂冠詩人に求められる資質を「準備なしに詩を作り、必要とあらば数限りなく生み出すことができなければならない」と規定しているのである。さらにこうしたポウプの三文文士観から派生してきた、ブラックモアを主な標的とする『ダンシアッド』における書物の量感に対する風刺を取り上げた。「あれだけ数限りなく作品を生み出せば、その著作もさぞかし、大きく、重たかろう」という理屈である。最も分かり易い例は、第2巻の居眠り我慢競争で、愚鈍の女神が“Blackmore’s numbers”(370)の重たさを計る場面であろう。一読すれば、ブラックモアの著作の内容面での重たさ(退屈さ)を揶揄しているように思えるが、実はその裏でその物理的な重たさ(著作の大部さ)をも槍玉に挙げているのである。

『ダンシアッド』におけるこのような風刺次元を確認した上で、第1章後半では、序章で触れた最近のポウプ観を踏まえ、自身の書簡集出版をめぐる奸計、及び『イリアス』(*The Iliad*)の英訳に付した注釈を手がかりとし、自らが揶揄している三文文士的所業に彼自身も無縁ではいられなかった点を論じた。書簡集出版については、実はポウプは自らの書簡集を自らの手で出版したかったのだが、当時は著者自らがその書簡集を出版するなど、許容されるべくもない、はしたない行為であった。そこで、彼は一計を案じカール(Edmund Curll)に著者すなわち自分に無断で書簡集の海賊版を出させることで、著者自ら真正版を出さざるを得なくなったという状況を作り上げたのである。また『イリアス』に付された注釈について、ジョンソン(Samuel Johnson)は「書物の嵩を増やすためだ」と喝破している。三文文士の著作の重たさを揶揄していたポウプであったが、実は自分も少しでも書物の嵩を増やすために、奮闘していたのである。“gentleman-author”という一面的なレッテルでは、この詩人の全貌をとて捉えきれず、かつ「ポウプ対三文文士」という単純な構図ではこの詩を把握できない点を示した。

風刺の対象(「何を」)扱った第2章では、従来見逃されてきたこの詩の風刺対象として1. 旧態依然として自己改革機能を失ったかに見える18世紀イギリス社会、2. 物理的存在としての書物、3. フランス料理とイタリア・オペラ、4. 叙事詩が有するはずの教化啓蒙の機能、の4つを挙げた。まず1. については、第4巻に見られるものであり、この巻を読めばすぐに看取される眠気・倦怠のイメージこそ、実は同時代の旧態依然たる空気を告発するメタファーに他ならないことを論じた。18世紀当時は批判精神や改革機運の欠落といった悪弊が社会の各方面に見られた。歴史学者トレヴェリヤン(G. M. Trevelyan)も18世紀に国王のお墨付きを得た諸組織、教会、大学等を「改革の恐れもなく、気

持ちよく眠り込んでしまった」と評している。このことからして第4巻でポウプが用いているイメージは、彼独自の偏った見方ではないと言えよう。また2. については、人は生→死→生を繰り返すという冥界のメタファーとも呼ぶべきサイクルを下敷きにした造本過程や、上流社会で当時流行った装飾本に対する風刺が『ダンシアッド』に読み取られることを述べた。ポウプがわざわざ愚鈍の女神の館を **Rag fair** の近くに設定していることの意味も、このことから読み解けるのである。次の3. においては、フランス料理とイタリア・オペラに対する風刺の背景に、共通した図式が存在している点、及び政治的な文脈が影を落としている点を検証した。特に前者に対する風刺に関しては、当時のキット・キャット・クラブとビーフ・ステーキ・クラブのライバル関係を読み取ることができる。最後の4. においては、まず往時のギリシアにおいて叙事詩が道徳の教科書のような役割を担っていた事実を指摘した。その上で、『オデュッセイア』(*The Odyssey*)の英訳に付した注や『髪略奪』(*The Rape of the Lock*)をめぐるテキストにおいて、如何にこの叙事詩についての約束事が全うされたり、裏切られたりしているかを確認した。一方、叙事詩のパロディーと見なされている『ダンシアッド』においては、そもそも読者が教訓を引き出せるような **action** を主人公が為し遂げていないこと、その点で『ダンシアッド』は叙事詩のパロディーではなく、叙事詩のアンティテーゼと称すべき作品であることを論じた。

最後の第3章では、風刺の手法(「どのように」)について論を進めた。まずポウプの個人風刺の背景について、ある悪弊を矯める際に、個人を名指ししない漠然とした風刺は無力であるとする、彼の風刺哲学を確認した。その上でその哲学がどのように実践されていたかを、彼のダンの模倣詩を例に取り上げ検証した。続いてそうした個人風刺が孕む危険性を意識した上での、彼の政治的中立性について論じた。ブルックス＝デイヴィーズ(**Brooks-Davies**)が指摘しているように、トーリー彙編であることは覆うべくもないが、当時の文人には珍しくポウプは政治パンフレットの類は全く書いていないのである。『ダンシアッド』との関連では、この作品を非政治的、非党派的に読むことで、新たな解釈の可能性を提示した。またこの作品の前3巻と第4巻の風刺対象の変化について、他の作品も視野に入れて、その分水嶺を1730年と特定し、この分水嶺を挟んでポウプの風刺手法に変化が見られること、すなわちモック・ヘロイックの技法を誇示する努力が放棄され、内容をストレートに伝えようとする方向に舵が切られたことを跡づけた。

第3章後半では、まずポウプが韻文で書くことの効用をどのように考えていたかを考察した。ロック(**John Locke**)の経験論も援用しながら、実はそこに「経験するテキスト」というポウプに特徴的な戦略が絡んでいることを明らか

にした。次に第2章でも論じた『ダンシアッド』におけるイタリア・オペラに対する風刺に、違った角度から再び光を当てた。つまりポウプにとって音楽と詩は決して別種の芸術ではなく、一種の *continuum* (連続体) を成すものであり、「音と意味は互いに響き合うものでなければならない」という創作哲学を奉じるポウプにとって、歌詞の意味が理解されないイタリア・オペラの流行は決して対岸の火事として黙過できる現象ではなかったことを論じた。最後にポウプが「自然に倣え(*follow nature*)」と言う時、その *nature* という語には本来の「動植物を含めた文字通りの自然」という意味が失われていないことを検証した。その際、スチュアート朝期に特に見習うべきお手本とされたのがミツバチであった。マンデヴィル(*Bernard Mandeville*)は、その名も『蜜蜂の寓話』(*The Fable of the Bees*)という作品で「ミツバチは人間の行動を全てミニチュア版で実践した」という言葉を残している。ポウプが敬愛していたドライデン(*John Dryden*)が英訳した『農耕詩』(*The Georgics*)第4巻にも同じ発想が読み取れる。そして、そこには文字通りの自然を直に観察することを奨励したナチュラル・ヒストリーの視点が活かされているのである。当時王立協会が標榜した新しい科学とは、自然は一定不変の法則によって支配されており、実験と観察によってその法則を抽出し人類の幸福に役立てることを目的としていた。明らかに、その根底にあるのは「森羅万象には絶対者としての神の英知が表現されている」という考えであった。そしてこの考えはドライデンやマンデヴィルに留まらず、ポウプの盟友であるスウィフト (*Jonathan Swift*)やゲイ (*John Gay*)、さらに彼の後に続くフィールディング(*Henry Fielding*)やゴールドスミス(*Oliver Goldsmith*)のテキストにも跡づけられる。そしてこのような野外での实地観察の対極として、王立協会が戒めていたのが「書齋に閉じこもって、書物ばかりを読み漁って事足れり」とする態度、すなわち *book-learnedness* であった。『ダンシアッド』における *book-learnedness* に対する揶揄も、こうした同時代の文化的な潮流との関連で捉え直すことができる。そしてこの視点から『ウィンザーの森』(*Windsor-Forest*)と『ダンシアッド』が実は対照されるべき作品であることを証し、『ダンシアッド』に登場する愚物が愚物たる所以の一端を解明した。